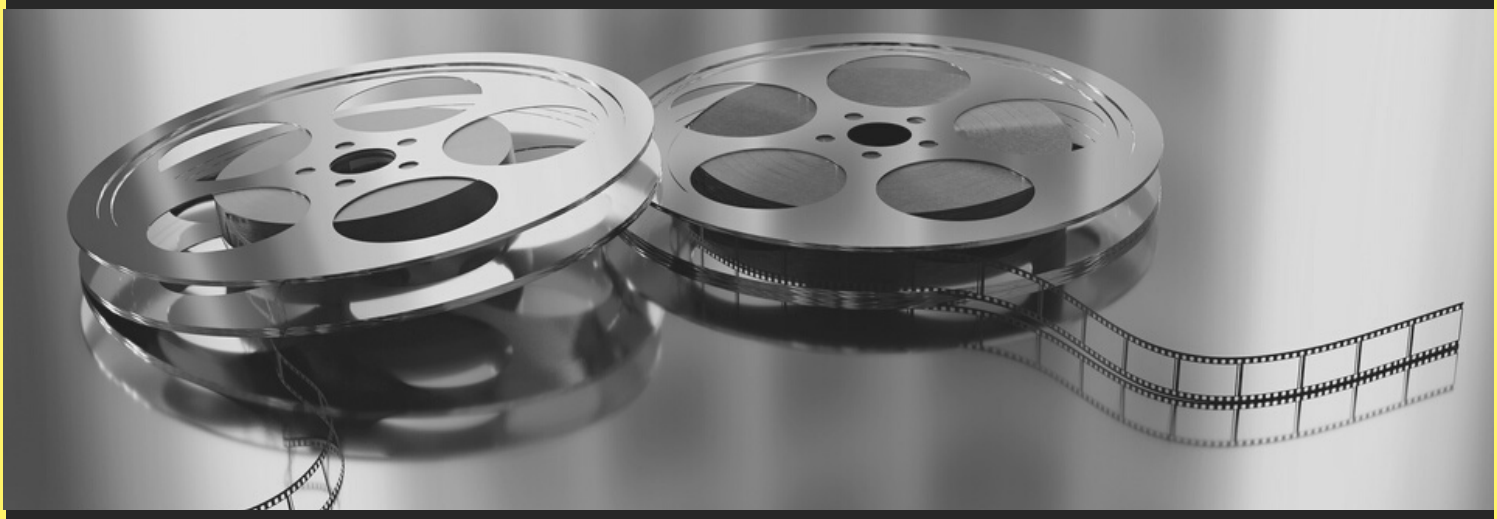
JAUW＜映画クラブ＞会報

シネマ通信

第10号（2023年10月31日）



私がやりました
―The Crime is Mine―

監督、脚本：フランソア・オゾン
出演：ナディア・テレスキウィッツ、レベッカ・マルデール
　　イザベル・ユペール、ファブリス・ルキーニ

パリの高級住宅街で大物映画プロデューサーが殺害された。容疑をかけられた売れない新人女優マドレーヌ（ナディア・テレスキウィッツ）は、「自分の身を守るために撃った」と自供し、親友で駆け出し弁護士のポーリーヌ（レベッカ・マルデール）と共に、法廷で争うことになる。
練り上げた鮮やかな弁論と、感動的なスピーチで陪審員と大衆の心をつかむことに成功した二人。見事、正当防衛で無罪を勝ち取ったマドレーヌは、一躍時の人となり、大スターの座へと駆け上がって行く。
しかし、富と名声を手にし幸せに酔いしれる二人の前に、往年の大女優オデット（イザベル・ユペール）が現れ、真犯人は自分だと名乗りを上げる。1930年代のパリを舞台に、”犯人の座”をかけた3人の女たちの凄絶な駆け引きが始まる･･･

第10回鑑賞作品

パリの大豪邸で
大物プロデューサーが
殺害された
容疑者は無名の新人女優

About Them

「私がやりました」の脚本と監督を手がけたフランソア・オゾンは、独自の映像世界を築きながら、フランス映画の芳香を放ち続ける稀有な存在。パリで生まれパリ大学映画コースを終了したハンサムなパリジャンで、自らゲイであることを公表しています。
「小さな死」「サマードレス」などの短編で高評価を得た後、2000年にはライナー・ベルナー・ファスビンターの戯曲を映画化した「焼け石に水」で世界的名声を獲得。「幻」ではシャーロット・ランプリング、「8人の女たち」ではカトリーヌ・ドヌーブと、大女優に新たな魅力を発掘。「スイミング・プール」「危険なプロット」「婚約者の友人」とヒット作を送り出し、2019年には、教会で実際に起きた少年たちの性被害を暴いた「グレース・オブ・ゴッド告発の時」でベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞しました。
本作では、仏のもう一人の大女優：イザベル・ユペールと二人の若手女優を、いかに絡ませるのか？この監督の新作には、いつも胸が高まります。

About Something

質か量かと問われたら、中年以降の日本人なら、ほとんどの人が質と答えることでしょう。もちろん私もその一人。しかしこの度は、量の圧倒的な力に魅了されました。それが、ブラジルとアルゼンチンの国境に位置するイグアスの滝。ナイアガラ、ビクトリアと共に世界三大瀑布と称される景勝地。大小の滝と虹とが彩なす一大パノラマには、ただ立ち尽くすのみ。この瞬間が、人類の美意識の原点かも知れません。
今回の旅行のもう一つの目的地は、アルゼンチンの首都ブエノスアイレス。子ども時代に読んだ長編漫画「母をたずねて3千里」で、主人公マルコが母を尋ねた港町。海を渡り、自分もいつか行ってみたいと願ったものです。思えば、私の海外憧憬は、この頃から始まっていたのでしょうか？
しかし今の私にとってこの地が意味するものは、香港の巨匠ウォン・カーウァイ監督の映画「ブエノスアイレス」です。主演は、世界的大スター、トニー・レオンとレスリー・チャン。倦怠期のゲイカップルが、関係修復のためにイグアスを目指して旅するという物語。ところが道に迷った二人は、途中で喧嘩して別れ、また同棲し、また別れ･･･の腐れ縁。恋人たちの気だるい日常を詩情豊かに描きあげ、カーウァイ監督が第50回カンヌ映画祭で最優秀監督賞を受賞した作品です。”南米のパリ”の異名をもつ美しい街並みと、喧嘩と酒の匂いが絶えない路地裏。この地に立つと、相手に飽きる前に人生に飽きてしまった二人の若者を描く舞台に、監督がこのエキゾチックタウンを選んだ理由がよく分かります。
最後の夜には、伝説の小ホール「ALMACEN」で念願のアルゼンチンタンゴを堪能。すべてをかなぐり捨てて、男であること・女であることを突き詰めた究極のダンス。鍛えられた肉体とその躍動美。バンドネオンのリズムに乗って、濃密な時間が流れていきました。
昨今のブエノスアイレスは、経済の低迷もあり、映画が撮影された1990年代とは少し様変わり。ヨーロッパ風の街並みにも、衰えが見えます。それでも短い滞在で、これほど心を揺さぶられた街は他にはありません。監督の創造意欲をかき立てたあのミステリアスな空気感が、今も漂っているのです。

文責：安東桂子